

河上幸子著

『在米コリアンのサンフランシスコ日本街 ——境界領域の人類学』

御茶の水書房、2014年、5,600円＋税、198頁

康陽球

本書は、米国・サンフランシスコの日本街（Nihonmachi）を生活やビジネスの拠点としている、在米コリアンをはじめとしたアジア系マイノリティの民族誌である。従来のエスニック・マイノリティ研究は、マイノリティの様々な実践を社会的弱者のエンパワーメントとの関わりから論じてきた。そういった議論で「文化」は、集団的なアイデンティティを構築するための実践として取り扱われてきた（13頁：以下、本書の引用頁は数字のみを記載する）。しかし近年、エスニックな「文化」が商品化され経済的資源としての価値が高まることで、「文化」は創作・消費されるものとなり、その主体は必ずしも当該「文化」と結びつくアイデンティティをもつ人びとではなくなっている。しかしその事実、メディア表象やマイノリティ研究の影に埋もれてきた。そのことに対する問題意識が、本書の出発点になっている。

本書の構成は次のとおり。

序章 見えない場所の意味を問う

第1章 在米アジア系マイノリティの日本街

第2章 在米コリアン高齢者の日本街

第3章 在米コリアン企業家の日本街

第4章 在米アジア系若年層の日本街

第5章 境界領域を人類学する

本書の特徴は、1) アジア系マイノリティの生活拠点となっている日本街の実態と、2) 日系以外の人びとが日本街を「私たちの街」として表象しない背景に作用する力学を明らかにしている点にある。第1章「在米アジア系マイノリティの日本街」ではこの二点を明らかにする意義が、ジャパニーズ・アメリカン研究とコリアン・アメリカン研究との関係から論じられる。現在、サンフランシスコ日本街には、ハングルの看板が立ち並び、コリア系の高齢者が住み、アジア系の若者たちが日本のポップカルチャーを求めて集まってく

る。しかし日本街を調査した先行研究は、日本街を日系マイノリティがコミュニティ・アクティビズムを展開する舞台として扱い、社会運動に携わる者のみをコミュニティの一員として取り扱ってきたため、日本街における複雑なエスニック関係が見えてこなかった。また、従来のコリアン・アメリカン研究は、「在米コリアン」という主体構築の過程やコリアンと他人種との関係には着目しても、アジア系同士の関係や在米コリアンがアジア系であることを利用して商売をしているということには目を向けてこなかった。そこで本書は、アジア系の人びとが日本街に集う経緯と、日本街が複雑なエスニック関係を内包しながらも「日本街」と呼ばれ続けていることの背景に交錯する力学をひも解きながら、アジア系マイノリティたちがとり結ぶ境界横断的な関係のあり様を浮き彫りにする。

そのために本書がとった戦略は、「アフニティ空間 (affinity space)」(14) として日本街を描き出すことである。James Paul Gee によると、「アフニティ空間」とは、「ある共通の関心のもとに集まった多様な人びとが、互いのメンバーシップや帰属性を問わずにそれぞれの目的やニーズにあわせてかかわりあい、自分に必要な知識や資源を得ると同時に、新たなコンテンツを自ら提供して関係性を刷新し続けるような社会空間」[Gee 2007: 87] である。「アフニティ空間」という概念は、情報技術教育の分野で、ソーシャルメディアを介した人びとの相互関係や学びのプロセスを説明するために、実践コミュニティ (communities of practice) の代替概念として登場したモデルであり、オンラインゲームの利用者の関わり合いの分析から出てきた概念である。しかし著者は、「共通の目的や関心にもとづく関係性が、人種や階層、ジェンダー、障害の有無といったアイデンティティよりも優先される」(15) ことを想定する「アフニティ空間」という概念が、日本街の現状を理解する鍵となると述べる。「アフニティ空間」の特徴として、新参者や常連の区分、ヒエラルキーがないこと、他者とのかかわりあいを重視しつつも仲間意識の形成が前提とされないことなどがある。この特徴は、規模も文化的背景も様々な機関や個人（イラン系の開発業者、コリア系の居酒屋、香港生まれアメリカ育ちの若者など）が日本街を形成しているという現状をとらえやすくするという。日本街における実践は、アイデンティティ形成や特定の共同体への帰属がめざされているわけではなく、コンテンツの創造やコンテンツを介したやりとりにより重きが置かれており、経済資源や商品として「文化」を構築する行為であるからである。序章「見えない場所の意味を問う」では、以上のように「アフニティ空間」という枠組みを通して、境界の不可視化・横断・流用といったアイデンティティ表象とは結びつかない人びとの「文化」実践や関係のあり様を描き出すことが可能になると述べられる。

第2章「在米コリアン高齢者の日本街」では、コリア系高齢者の消費行動の分析から、彼ら彼女らの実践や関係性のあり方が、「単なるアイデンティティ・ポリティクスに還元しづらい重層性をも」(103) ことが明らかにされる。コリア系高齢者は、マイノリティとして生活保護を受けやすいことと「高齢者の自立」という米国的な価値観に後押しされながら、低所得者向けの住宅が多く利便性のよい日本街に住み、日本の商品や日系の福祉サービスを利用し、日本の宗教団体と関わりをもつ。それを可能にするのは、植民地経験や日本での居住経験によって会得された日本語を話すスキルである。本書は、コリア系高

齢者が単に生活の困難を解消するためだけに日本語を介して日系社会と関わりをもっているのではないとし、日本と朝鮮半島の間で歴史的に形成された生活形態の類似性が人びとの選択を方向づけていること、そして売り手／顧客としての確かな信頼関係が日系・コリア系の人びとの間に形成されていることを明らかにする。さらに本書は、日本街の日系高齢者福祉施設がコリア系高齢者の受け皿になっている理由として、移民歴の長い日系社会と新移民であるコリア系社会の間には、米国社会における発言力や、財源を確保する力に大きな開きがあることを指摘する。

第3章「在米コリアン企業家の日本街」では、コリア系起業家たちが日本街の呼称として使用する「ジェペントウン」という言葉に着目し、コリア系の起業家たちにとって日本街がどのような場所であるのかを、日系社会との関わりから論じる。コリア系の増加に伴い、日系社会ではメディアを通して日本街の進むべき方向が盛んに議論される一方で、コリア系の起業家自身が、日本街の一員であることを主張する動きはほとんどない。その理由として、コリア系の起業家は、連帯意識が希薄で、連帯を図ることよりも個人の努力を通して成功を果たすことを重視していることと、「日本・日系アメリカ文化」をテーマとした日本街に価値を見出しているため、日本街がコリア系の街になることを望んでいないことが明らかにされる。日本街の保存と繁栄を望む日系の人びとが、「コミュニティ」の一員として、コリア系起業家との連携を模索しているのに対し、在米コリアン起業家たちにとって日本街とは、あくまで個人として生活やビジネスを営む場所であるとされる。このように「ジェペントウン」は、コリア系という「当事者性の発露」(130)としてとりあげられることもなく、連帯や相互扶助に基づくアメリカ的な「コミュニティ」という言葉でも表現されない「非公式で不安定な場所」(130)であるが、コリア系起業家の生活を支える基盤として機能していることが明らかにされる。

第4章「在米アジア系若年層の日本街」では、1965年の移民法改正以降に移住してきた人びとの子ども世代にあたる米国生まれ・米国育ちの若者たちが、日本街における日本のポップカルチャーの創造と消費を通して、ポストコロニアルなエージェントとして顕在化していることが論じられる。日本街が日本のポップカルチャーの発信拠点としての規模を拡大する傍ら、その消費と創造の担い手になっているのが、アジア系アメリカ人であることを自認する若者たちである。彼ら彼女らは、日本のアニメやマンガに興味をもち、日本街を拠点に、アニメの翻訳や創作活動をしてきた。その下地となっているのが、若者たちの親世代が出身国で幼い頃から日本のアニメやマンガに触れていたという事実である。しかし同時に若者たちは、日本の文化に関わることで、帝国主義を連想させる日本という枠組みに反発する親や祖父母の否定的な感情とも対峙していることが明らかにされる。この両義的な状況を本書は、若者たちが「日本帝国主義の遺産」である自らのポストコロニアルなルーツを、「文化」の消費を通じてトランスナショナルに継承しつつ、「日本的な文化イメージの生産機構を支える諸産業セクターにポストコロニアルなエージェントとして組みこまれている」と分析する(147)。

第5章「境界領域を人類学する」では、これまでの記述にそって結論が示される。まず、日本街が「ジェペントウン」としてアジア系マイノリティ、とくにコリア系の人びと

の日常生活に重要な役割を果たしながらも、「私たちのコミュニティ」として表象しづらい場所であったのは、日本街が「日本の街」でなくなることで生活の基盤を失うという経済的な理由に加え、生涯にわたって繰り返される移住やポストコロニアルな経験に特徴づけられるコリア系の人びとの複雑な個人史が、「在米コリアン」という言葉で表される画一的な枠組みに自己を結びつけることを阻んでいるためであることが論じられる。日本街の在米コリアンたちは、「外向けに構築される自己像とは乖離した実践領域や内面の葛藤とも折り合いをつけながら日々、生きている」(158)とし、彼ら彼女らの生活世界が築かれる領域は、「オリエンタル」なものを求める一般消費者をターゲットにすることで集団間の差異や不均衡が資源となり、市場競争を通して個人化された人びとが差異の認識を曖昧にしているという点で「アフニティ空間」とであると結論づける。

さらに本書は、「アフニティ空間」という概念に、「帰属の重層性や多元性の狭間で文化が資源として構築される側面をとらえる上で参考になる」(160)という評価を与えつつも、「エスニシティやジェンダーといった差異が社会的不平等と結びついている構造的現実」(160)が不可視になるという問題があることを指摘する。ここで著者は改めて、本書が描き出した領域を「境界領域」(162)としてとらえなおす。「境界領域」とは、「境界領域のフィールドワーク」を続ける新原道信の概念であり、日本街のような「境界区分の「変容」「超越」とともに、グローバル・イシューズが衝突・混交・混成・重合するローカルな場」[新原 2012:68]をとらえる糸口となりうるものである。新原は、境界領域を3つの側面に分けて整理している。地理的、物理的、生態学的、地政学的、文化的な層に対応する実体的な領域としての「テリトリー領域」[新原 2012:69]、個々人の身体に埋め込まれた領域に対応する「心身／身心現象の境界領域」[新原 2012:69]、そして「メタモルフォーゼの境界領域」[新原 2012:69]である。本書によると、著者が「ジェペントウン」と名付けた「在米コリアンのサンフランシスコ日本街」は、「テリトリー領域」と「心身／身心現象の境界領域」の間に位置する「メタモルフォーゼの境界領域」という。「メタモルフォーゼの境界領域」とは、アイデンティティの不確定性に直面した人びとが、有意味な他者と、内面の深い部分からの「共感・共苦・共歓」の相互行為を行うことで、互いに同一の人間ながらも、変異 (metamorphosis) していくような「ヘテロトピア」[新原 2012:69; 鈴木 2012:137]とされる。メタモルフォーゼに連なる「ヘトロピア」とは、どこにもない場所 (ユートピア) ではなく、私たちの日常生活の内部に実在する場所である。H. アーレントのいう「内なる他者性」「一者の中の二者」のように、「ヘトロピア」は、ひとつの文化の内部に見出すことができる他のすべての場所を表象すると同時に、それらに異議申し立ても行い、ときには転倒してしまうような「異他なる反場所」である [鈴木 2012:138]。在米コリアンの日常生活の拠点である「ジェペントウン」は、研究やメディアでとりあげられることはない。在米コリアンが日本街の領有や権利をもとめることもない。自らが声を上げることのない在米コリアンには、コミュニティの意義を理解しない利己主義者といった否定的なイメージの流通に抵抗する手立てももたない。しかし「ジェペントウン」は在米コリアンの生活世界に根付き、米国主流社会の常識的な価値観や序列関係、ポストコロニアリズムによって構築される境界を覆すようなダイナミック

な関係性を生み出す「ヘテロトピア」として経験されていると本書は締めくくる。

以上が本書の内容を評者の関心にそってまとめたものである。本書の成果は丹念な調査を通して、植民地の経験や過去の記憶、文化の隣接性、外部からの眼差しを資源として活用し日々を生き抜く人びとを、人びとを巻き込む様々なポリティクスを掬い上げながら描き出したことである。とくに、市場経済の中で個人化されたエスニック・マイノリティがポストコロニアルな関係を資源に生活を営んでいるということは、歴史性が看過されがちな北米を中心としたエスニシティ研究や人種間関係を扱った研究では描かれてこなかった側面である。本書は、市民社会におけるエンパワーメントとしてマイノリティの実践を扱ってきたエスニック・マイノリティ研究に対しても、トランスナショナルな人やモノの移動が活発になり「境界領域」が生み出し続けられている「現在」を理解する上でも、示唆に富む視角を提供している。

そのような成果をふまえて、評者が抱いた疑問を二つ記しておきたい。一つ目の疑問は、本書が依拠する「アフニティ空間」という概念についてである。本書は、社会的カテゴリーを絆や境界構築の前提としてとらえるのではなく、目的達成の資源として使われうるものと考え、「アイデンティティ形成の議論では可視化されない領域」(13)を描くことを意図している。しかしそのために、「アフニティ空間」という概念に依拠する合理性に疑問が残る。まず、実践共同体の代替概念を本書の議論に適用するには、実践共同体の議論とエスニック・マイノリティ研究における「コミュニティ」や「アイデンティティ」という語によって論じられる趣旨の違いを検討し、本書の議論に則した独自の枠組みとして提示しなおす必要があるのではないだろうか。また、この概念の限界を示すのが狙いなのであれば、本書の事例と突き合わせて論じることでより説得的な議論が可能になると考えられるが、それがなされているとは言い難い。何より、本書の事例の検討は著者独自の分析によって進められており、「アフニティ空間」という概念に依拠せずとも議論は十分に可能だったと考える。むしろ、本書の結末で示される「境界領域の人類学」というアプローチを資料の検討に生かすことで、一貫性や主張がより際立ち、本書が依拠する新原道信の「境界領域」の議論を発展させることができたのではないだろうか。

つぎに、本書で頻出する「文化」という語の使用に関する疑問である。本書の出発点は、「文化がもつ意味合いとは、必ずしもアイデンティティ形成という文脈に限定されるわけではない」(13)という主張である。本書は、人類学が「共同体的なアイデンティティ形成につながる営みを文化と呼んできた」(13)とし、「特にマイノリティ研究では、社会の少数派であるマイノリティが相互扶助のために、そして政治的主体となるために、集団としての自己を作り上げるエンパワーメントの過程が議論の中心になってきた」(13)と述べる。その上で、「人類学における新たな文化表象の可能性の検討」(14)がめざされる。しかし、どのような意味で「文化」や「文化表象」という語を使用しているのかがやや不明瞭である。本書には、人類学者によって「文化」として記述されてきたもの、マイノリティが抵抗表象として実践する「文化」、「商品化」される「文化」が登場する。文中で使われる「文化」という語がこれらのうち何を指すのか、あるいはそれらを一括りに「文化」としてとらえているのか、その場合、一括りにとらえる意義は何なのか明示さ

れずに議論されるくらいがある。それらを示すことで、本書のめざす「文化表象」に関する議論をより深めることができるのではないだろうか。

最後に、ここまで指摘したことが本書の魅力を減じるものではないことを改めて強調しておきたい。本書は、都市に住む人びとのとらえにくい社会関係を、巧みなインタビューとフィールドワークで拾い上げ、それらを一つ一つ結びつけることで、多様な背景をもつ人びとが身を寄せ合う日本街という場所を立体的に描き出すことに成功している。本書を読み進めるごとに、日本街を縦横無尽に駆け回る著者の姿が目には浮かぶようであった。本書が導き出す結論は、そのような粘り強い調査の賜物である。都市におけるフィールドワークに関心をもつ多くの研究者に一読を勧めたい一冊である。

<参考文献>

新原道信 2012 「“境界領域”のフィールドワーク(2)——カーボベルデ諸島でのフィールドワークより」『中央大学社会科学研究所年報』(16): 67-98.

鈴木鉄忠 2012 「“境界領域”のヨーロッパ試論——イストリア半島を事例に」『中央大学社会科学研究所年報』(17): 133-151.

Gee, James Paul 2007 *Good Video Games + Good Learning: Collected Essays on Video Games, Learning and Literacy*. New York: Peter Lang.